

予科 思いだすことども

松山亮次郎

もご存知のことであろう。鶉殿氏も改造社の短歌研究編集の衝にあたられ、戦後、改造社の崩壊を体験、予科の講師から後経営学部にも所屬、エピソードの多い人であったが他界されてから既に時が経つ。

加藤隆氏より予科の思い出をとのご依頼である。予科の教壇に立ち、かつ現存する者は私だけであるということによるらしい。ままよということ引き受けはしたものの、遙かな過去のことではあるし、昭和二四年の新制度施行で、予科は解消、従って私が非常勤講師として予科の教壇に立ったのは僅か二年の間に過ぎない。

私が就任した昭和二二年に、同じく講師に就任された人に独逸語の島中鵬次氏、国語の鶉殿正元氏の二氏がいる。島中氏はいうまでもなく雄作氏の御曹子、中央公論社を継承され明治の教壇に立たれた期間は短かかったが、紳士録の氏の経歴は明治大学予科講師から始まる。やはり印象深かったのだろう。最近亡くなられたことは誰し

予科とは何か、さまざまな観点があろうが、かつて大衆学広報（三八七号）の論壇に載せられた前理事有馬輝武氏の一文「恩師の一言」はそれをサジェストするのに適切なものと言えよう。さりげないひと言が受け手にとつて限りない感銘となり、時には一生を支配する程の衝動を与えた例を三人の師との交渉に即して述べられたものである。

一人は英語の古沢安次郎氏である。英語詩の作詩法、ひいては思考法への示唆などから人生の秘奥へ、独逸語の道部順氏の、それとなき商学部へのいざない、経営学の佐々木吉郎氏の読書のすすめなど、それらのふとしたひと言が氏の人生に大きな影響を与えたことが述べられている。有馬氏が挙げられた三人の恩師のうち、古沢道部の両師は共に予科を担当された。今有馬氏の文章を紹介した目的は大学教育での予科の役割について言いた

かったからである。佐々木氏も直接予科の講義は持たれなかったが、道部氏とは親密な間柄で、両師は昭和二年ドイツへの留学の行を共にされたのである。私はまだ子供だったが、身内に明治の学生がいて、敬送旁々横浜港の見物に連れて行かれた。数年前、たまたま横浜港からクルージングではあるか、企業の研修を兼ねた団体が多かったのか、棧橋には乗り込む人々の氏名と企業名を記した幟が林立、見送りの人で賑っていた。やがてテープの乱舞となったのであろうが、私は大棧橋を一順して帰った。

両師の出發の光景は數歳に過ぎなかつた私の眼にも鮮やかに残っている。横浜港の四号岸壁、郵船の箱根丸、數多の幟、「白雲なびく」の大合唱、やがて銅羅のけたたましいい音、テープの交錯、螢の光の流れる中を船は静かに離れてゆく。舷側に立ち尽す両師の姿は今でも私の心に焼きついてゐる。両師の交情は第一次大戦中フランスにあって行動を共にした河上肇と島崎藤村の關係にも似たものがあつたようだ。往時の船で今姿を見うるものは山下公園の一部に繫留されている氷川丸ぐらいであろう。

日枝丸、平安丸の三隻は同型船で所謂大圏航路で、横浜、シアトル間を十一日、当時としては最短時間で走破した船だ。桑港航路は浅野総一郎の東洋汽船の春洋、地洋、天洋丸に代り日本郵船の浅間、秩父、竜田丸が就航したのは昭和三年からである。第二次大戦初期テムズ河口で触雷沈没した靖国丸は照国丸と並んで欧州航路の新鋭船であつた。照国は鹿兒島にある島津藩祖を祭る神社名である。先人の渡航を追体験すべく漸く船便を求め得て苦勞の果てフランスに赴かれた伊東広太氏も今では鬼籍に名をつらねるひとりである。

話は変わるが終戦の年、すなわち昭和二十年五月二五日の空襲で新宿周辺は焼野原となつた。京王線沿いは笹塚までほぼ全焼、明大前周辺は相半ばする状態であつた。和泉校舎は被害は受けなかつたが接収されて陸軍の陸地測量部になつてゐた。慶応の日吉校舎が接収されて陸に上つた連合艦隊の司令部となつたのと同断である。以前体育館のあるあたり南北に松の生えた台地があり、そこにバラック建の平屋、南に一部二階の木造家屋があつた。学生の課外活動の施設で静思寮、時習寮とよばれてゐた。

が静思寮は程なく新制度下学生の急増期には教室に転用され、学生からは鶏小舎教室の異名で呼ばれたが、戦後数年の間は戦災で家を失った教職員の仮住居にあてられていた。静思寮には明眸の夫人を喪って憔悴されていた予科切つてのダンディな独逸語の木下勇氏、ベニヤの壁で隣合わせで住んでいたのが歌人で国語の宮城謙一氏である。氏の部屋では名手花柳国葉女史の舞を屢々見る機を得たが、後日結婚の報を得て賀意表すべく訪れた時、それは国葉女史ではなく外務省にお勤めの才媛であった。その後結核で休まれ、給与振込以前のこと、蒲田蓮沼のお宅に暫くお届けしたことがある。氏の亡くなられたのは以前のことであるが、今では大学の名簿に夫人の名前も見えない。

時習寮にいたのは国語の丸野、独逸語の菅藤氏の御一家である。菅藤先生の耳のひげという言葉は先生の老練であることの暗喩であったかも知れない。丸野氏は和泉財務担当の理事等をも務められたが小林予科長に信任され、御夫妻の名前も名簿に今では見えない。

新制度への移行つまり予科の終焉という時点で思わざ

る事件が出来した。小林予科長の急逝である。旧第一校舎正面階段二階の一隅の小部屋が予科長の執務室であり、そこで脳出血で倒れたまま意識を回復することはなかった。この時氏は専務理事、また初代文学部長に擬せられていた。葬儀は今はない大講堂で行われた。氏は藩州赤穂の出身である。導師は赤穂から来られた。導師のつけられた院号は無欲な人柄を表すべく眞空院とあったが、連想するものとの関連から空々院と改められた。嗚咽の絶えない葬儀であった。

昭和二三年は予科最後の年である。小林氏が月杖内海文蔵の跡を受けて予科長に就任、以来二十年目にあたる。責任ある要衝に連続二十年当たる。稀有なことである。その二十年の在任を記念して予科の専任の人たち、まだ若かった見波精、国谷純一郎等の諸氏の努力を中心に学生、父兄等の寄附を中心に建てられたのが小林会館である。一部二階のこの建物は第二校舎建造の際取り壊された。

今は亡きこの会館の思いの一つを記してこの稿をを終わりたい。

和泉で英語を教えられた菊池武一氏は仏文の菊池映二氏の父君であり、私の恩師でもある。宝生流の謡いの名手で、学生に謡曲を教えたいとのご注問である。私がたてた学生を集める画策は美女を囿としてとりこむことであつた。何十年もたつことだから名前を明かしてもよいと思うが、大塚久子君である。たまたま菊池師、彼女も高松の出身でたちまち彼女の一諾を得たのである。小林会館二階でのこの集まりは先生の熱心な指導により、水道橋の宝生の能楽堂に玄人のまさに声援はあつたもの度々出演したのである。さて小林会館楼上の学生諸君の切なる願望の一つは「大塚さんの膝を枕に横になりたいね」ということであつた。これもまた今昔の感を深くすることである。